

新たなチャプターに突入 エディンバラ・フェスティバル2015



PHOTO=EOIN CAREY

「おかげさまで。でも課題が見える。街の中心にあるフェス事務局の入り口では、5つ星が目映い数々の劇評を列記した大看板がお出迎え。ほぼすべての演目が高評価という見事な成果を挙げた新芸術監督リネハンに賛辞を述べると

はじめ、オリヴィエ賞の栄冠に輝いたイヴォ・ヴァン・ホーヴェ演出、ジュリエット・ビノシュ主演の『アンティゴネ』、日本にも多くのファンを持ち、世界が注目する演劇人サイモン・マクバーニーとロベール・ルパージュの新作一人芝居、ダンス界のカリスマ、アラン・プラテルの音楽劇と、今年のインターナショナル部門はこれ以上望めないほどの豪華なラインアップとなった。

「ほかのフェスでは、観客は事前にお目当てのチケットを入手して乗り込んでくるんだけど、エディンバラでは多くの人がここに来てから観る演目を決めるんだ。朝から夜中まで何かしら上演されているから、ほとんどの人が評判を

てきたのも確か。新たな劇場の発掘とかね」との答えが、頭の中はすでに来年以降の構想が渦巻いている様子だ。

前評判に違わず、むしろそれ以上に好意的な反響で活気づいたフェス。特にマクバーニーとルパージュの作品が昼夜で連日上演されていた、普段は国際会議場である会場には連日多くの人が詰めかけ、日を追うごとにチケットの入手も困難になっていった。

69 年続く夏の恒例行事にもかかわらず、開幕前から多くのメディアが注目したのが、今年からフェスティバルを率いる46歳の新芸術監督、アイルランド出身のファーガス・リネハン(写真)。ダブリン演劇祭で頭角を表し、その後シドニーで巨大フェスを成功に導いた、演劇祭を知りつくした男だ。このところ、拡大を続けるプリンジ(小劇場)部門の勢いに押され気味だったインターナショナル部門が、再び話題の中心へ再び咲くことができたのはなぜか。リネハンへのインタビューからフェスの全貌に迫る。



「887」PHOTO=ÉRIK LABBE

聞いてからチケットを購入するのさ。その傾向に配慮するために、演劇演目にかんしてはなるべく長い公演期間を設けるようにしたんだ」

例年は主要作品の上演が重ならないように予定が組まれ、各公演期間も4〜5日がせいぜいであったが、『アンティゴネ』、マクバーニーの『The Encounter（遭遇）』にかんしては期間を通して15回近く上演され、ルパージュの『887』も連日の上演で10公演を数えた。「二人でも多くの観客に上質な舞台を届けたい。そのために当日でもチケットが買えるよう、今回のロングラン上演を採用したんだ」

そのほかにも、エディンバラ・フェスのメリットである「クラシック音楽第一」という伝統を残しつつも、未知なる可能性を探るべく、今後はジャズやポップスも取り入れて、幅広い観客にアピールしていきたいと言う。

「このフェスティバルにおいても、『フェス独自の役割』というものを念頭において指揮を執ってきた。夏のシドニーでは祝祭性を重視するなどね。エディンバラにかんじて言えば『国際関係』がキーワードになると信じているよ。演者も観客も、どのフェスよりも圧倒的に世界のさまざまな人びとが会するのがエディンバラ。ここでは一流アーティストたちが発信する作品、さらには彼らの発言そのものが何物にも勝る権限を持つ。世界から集まった芸術家たちがこのフェスの核なんだ。そして、通貨や経済のグローバル規模の集中化が進む中、アートは国際協調の道を探る一方で、個々の文化的アイデンティティを確保することが

できるのか？ それこそがこのフェスの問いかけていくべき点だと思っている」

芸術監督が指摘する『国際関係』と『個人の確立』のバランスは今回のフェスを大成功に導いた2作品の中にも見つけることができた。『The Encounter』では、文明がもたらした文化の画一化を享受する現代人が、その起源となるものに『遭遇』した結果、何を見るのかがテーマ。1969年にアマゾンの奥地で起きたアメリカ人写真家の遭難事件を最新の音響システムを駆使して臨場感豊かに再現し、途中にマクバーニーの娘の声（録音）を挟み込むことで、深刻な環境破壊が未来にもたらす罪について警鐘を鳴らす。一方、ルパージュは幼少時に育った家の番地を作品名とした『887』で自身の出自を追った。ごくごく私的な家族の思い出をルパージュらしく映像と視覚のマジックでつづった一人芝居なのだが、そこからは多文化

PHOTO=ROBBIE JACK



「The Encounter」

社会（カナダのフランス語圏）で育った彼が見た国際関係と個人のかかわりが浮かび上がってくる。それにしても、就任1年目からこれほどのメンツを集めてしまったりネハン。あまりの豪華さに来年以降は大丈夫？という心配も。それについては「大丈夫、カードは有り余るほどあるから。デボラ・ワーナーやケイティ・ミッチェルにもぜひ登場してもらいたいし、総合芸術であるオペラの新たな企画も温めているよ」と余裕の笑みで安心させてくれた。気になるアーティストとは参加の有無にかかわらず継続的に話し合い、その可能性を探っていくそうだ。

彼の任期は2019年まで。8月のエディンバラ行き飛行機はますます混み合いそうだ。